

めでいかすどる Médicastre



思いが人の器を作る

鶴岡地区医師会

会長 中目 千之

新年あけましておめでとうございます。年頭にあたりご挨拶を申し上げます。

昨年は、金融バブルの崩壊、政権交代、また医療界においては救急医療での受け入れ拒否等、暗いことが多くあった一方で、当地区では庄内プロジェクトの本格的始動、連携パスの定着等、将来にむけての試行も行われた一年でした。今年、日本、鶴岡、そしてみなさんにとりましては、どのような一年になるのでしょうか？

1. 世界 08&09：昨年の世界の一番の出来事は金融バブルの崩壊と、これに起因した世界同時不況です。これは、貿易赤字と財政赤字の双子の赤字をかかえる米国で、米国だけにお金が集まる方法として金融工学が生み出され、強欲なウォール街の規制のない市場原理主義のもとに金融バブルが発生し、それがサブプライム問題を機に崩壊していったものです。証券化商品、デリバティブ（金融派生商品）、レバレッジ等の言葉が毎日のように新聞紙上をにぎわしました。景気の両輪は、企業の設備投資と個人消費ですが、米国においては個人消費を通り越して個人浪費になっており、これまではこの米国の個人浪費と円安のおかげで日本や中国の輸出が急速に伸び、結果的に世界全体が潤っていました。それが米国の住宅バブル、金融バブルの崩壊とともに世界同時不況に陥り、日本においても輸出関連事業を中心に大不況に陥っています。今年の日本は深く長い景気後退（リセッション）にはいることは間違いないとされ、さらにデフレの局面も予想されています。米国の新大統領はもちろん、世界各国は、政府が市場に大きく関与し、規制監視していく、いわゆる「大きな政府」にいったんは舵取りをしなければ、この世界同時不況は乗り切れないと判断し行動をとっており、これまでの「小さな政府、市場原理主義」のブッシュ共和党政権の主義は、

米国一極中心の金融市場原理主義の崩壊とともに消え失せようとしています。

2. 日本 08&09：世界の多くの経済学者は、日本は少子高齢化が急速に進み、経済が縮小していく、落日の国家と考えている。彼らは、アジアの経済の中心はかならず中国、インドにシフトしていくと論陣を張っている。今年の日本は景気後退が進む中で、その解決の一方法として内需拡大が言われて続けているが、毎年0.6%ずつ人口が減っていく社会でどれほどの内需拡大が望めるかということになり、これからは「ゼロ成長」時代の経済運営が大きな国家問題となりつつある。輸出もだめ、内需もだめという時代での活路である。行き場をうしなった企業は、高齢化社会だけでは間違いのない現実であることから、高齢化社会、すなわち介護の世界に進出してきており、今後は雇用の吸収もふくめ介護産業への企業進出が著明になってくるものと思われる。小泉元首相は小さな政府、市場原理主義のブッシュ政権の忠実なるしもべ、「忠犬純公」として、小泉構造改革を断行したが、結局、小泉改革は日本を「寒々（さむざむ）とした社会」にただけだった。現在の医療の現場で起きている多くの問題は、小泉改革の中の社会保障費削減に起因している。医療や福祉といった社会保障は、元来、お金がかかるものであり、削減すればいかに寒々とした社会になったかということを示している。5%の消費税でこれから加速度的にすすむ高齢化社会を支えることは至難のわざであり、財源としては、やはり消費税増税のほかになく、中福祉、中負担の社会を目指していくべきと考えます。

3. 鶴岡 08&09：昨年の鶴岡での明るい話題としては、黒川能パリ公演、オワンクラゲ、ラムサール条約、そして、「スーパー特区」指定で

す。「スーパー特区」は、先端医療開発特区の別称で、平成20年から24年の5年間にわたり、十数億円規模の補助でおこなわれる大規模プロジェクトであり、「がん医薬品・医療機器・早期臨床開発プロジェクト」の部門で、プロジェクトチームのひとつに鶴岡にある先端生命科学研究所が選ばれました。富田所長、曾我教授等のこれまでのメタボローム研究が高く評価され、がん早期診断への応用が期待された結果の選出であります。

当医師会でも、可能な限り協力をしたいと考えております。

当医師会での昨年の事業では、やはり庄内プロジェクトの本格的始動であります。これまでに本誌で数回にわたり特集を組んできましたので、ここでは詳しくは述べませんが、今年と来年が勝負の年と考えておりますので、会員の先生方のみなさんにはひきつづきご協力のほどをお願いします。そして、今年の一大事業は、新健診センターの設計です。昨年の12月に設計委託先が決定し、今年では会員の先生方のご意見を拝聴しながら、役員、職員一丸となって設計にあたっていく所存であります。

4. ステップス・アゲインスト・リセッション (steps against recession)

今年一年は間違いなく深刻なリセッション（景気後退）に、日本全体がおちいります。このだれもが経験したことのない景気後退の中で、我々はどうしたら、「鶴岡市民の健康を守る」ことができるでしょうか？それは「節度ある医療・福祉」「品位ある医療・福祉」以外にはありません。必要最小限の検査、投薬等による患者さんの自己負担の軽減、健康の維持や疾病の予防のための生活指導、老後や不景気に対する不安に対する精神的支援、職種間連携による切れ目のない、細やかな医療、福祉。このような市民、利用者、患者さんを核として中心におき、各職種間の連携の輪をそのまわりに構築した社会を形成して、寒々とした社会ではなく、暖かい街鶴岡に変えていかなければなりません。

また、深くて長いリセッション（景気後退）の

なかで、我々は組織を堅持し、身の丈に応じた成長をはかっていかなければなりません。

5. 思いが人の器を作る。

「会社や組織の大きさはトップの器で決まる」、「会社や組織はトップの器以上に大きくなることはない」。真実だと思います。

私たちはある意味ですべてがトップです。家庭での父親、母親もトップですし、会社や組織では社長だけでなく、部、課等含めさまざまな、小さな組織、グループの中で、その組織を束ねているという意味でトップにいるひとがほとんどです。自分が所属する組織を束ねている人が、その組織を大きくしていこうと欲するならば、まず自分の器を大きくする自己修練をしなければ、他人に何を要求しても、その組織は大きくなれないという教訓です。ではどうすれば、器を大きくすることができるのでしょうか？それは、物事をどんなことがあっても成就するという「強い」思いを持ち、行動にうつし、結果をだす、これを何度も繰り返すことではないでしょうか？この強い思いを持つということが、すべての始まりだと思います。不可能と思い、行動を起さないことがすべてを不可能にしているものであり、不可能なことはないという強い思いをもって行動すれば実現するという確固たる信念をもつことがすべてを可能にする、と信じるのが大事なのです。強い思いを持ち器を大きくする、これが私の今年の信条です。すべてのみなさまにとって成長の年でありますように。

新年を迎えて

鶴岡市立湯田川温泉リハビリテーション病院
院長 竹田 浩洋

新年明けましておめでとうございます。会員の諸先生におかれましては、ご健勝にて新春をお迎えのことと思います。

アメリカ発の世界不況が、決定的対応策がないまま日に日に深刻さを増すという、何とも重苦しい雰囲気の中で新年を迎えることとなりました。「チェンジ」を公約に掲げ、間もなく登場するオバマ新大統領が若さと手腕に期待し、バブル崩壊を乗り切った経験を持つ日本経済界の立ち直りを信じたいと思います。

一方、同様に暗いムードに包まれていたわが国の医療界では、世界不況より一步先んじて光明が見えてきました。社会保障費の抑制緩和、医師不足対策、介護保険報酬 3%アップなどの施策が、実行に移されることが確実となりました。また、世界一の医療制度を守らねばならないという、市民意識の高揚も心強い限りです。今年こそ医療・福祉の未来が開け、しっかりとした足取りで前進できる一年となるよう、祈りたいと思います。

一昨年 11 月、介護保険適応の療養病床を転換して増床した回復期リハビリテーション病床は、お陰様でその後順調成長を遂げ、新たに設けられた回復期リハビリテーション入院料 1 の基準をクリアしました。リハビリの成果を示す重症患者回復度の指標でも合格点を取ることができました。入院基本料および加算による増収は、病院経営の安定化にも大いに役立っております。

病床転換により、この度スタートした鶴岡地区脳卒中連携クリティカルパス（連携パス）の受け入れ体制も万全です。すでに導入済の大腿骨近位部骨折連携パスは、患者さんの評判も良好で、順調に運用されておりますが、このたび動き始めた脳卒中連携パスは、Net4U とドッキングが可能となり、一層利用価値の高いものとなりました。

骨折とは異なり、脳卒中は再発が少なくなく、また多様な後遺症や合併症に悩まされることが多い病気です。脳卒中連携パスは、急性期・回復期・維持期を一本に繋げる橋渡しの役割を果たします。連携パスによる連携の特徴は、双方向性の情報伝達と多職種が参加できる連携ということにあります。横の広がりを持つ Net4U の連携システムに、連携パスによる縦の連携が加わることは、重症者や重介護者の増加が予測される今後の脳卒中診療に、大いに役立つと考えます。今後先生方との連携を一層深めて行きたいと思います。

医療危機が叫ばれる中、遅ればせながら医師の不足や偏在に対する対策が打ち出されてきました。しかし、いつか当地に医師が派遣されてくる日が実現しても、医療環境に魅力を感じなければ決して定着することはないでしょう。当地区の特徴である連携の良さを更に一層グレードアップしていくことが、地域医療生き残りの早道となるかも知れません。

今年もどうぞよろしく願いいたします。

「がん登録あれこれ」

庄内保健所

所長 松田 徹 先生

1930 年頃から始められた地域がん登録は今や健康管理上の必須のツールとして法的整備が完了している国が多く、各種がんの罹患状況の把握のみならず、がん対策に多大な貢献をしている。わが国では健康増進法やがん対策基本法により法的な認識はされるようにはなってきたが、「地域がん登録法」など確固とした法的な基盤はない。しかし、その利用による恩恵は計り知れないものがあり、今回は主に地域がん登録を利用する立場にたったお話をした。

わが国では戦後、諸地域で開始された地域がん登録が、やっと医療界に認知され、近年急激にその存在意義が認識されている。山形県では昭和 49 年から地域がん登録が開始されたが、法的整備の進んだ韓国、米国、ヨーロッパ各国などは別にしても、国内では割合高精度で登録が行われている。

院内がん登録は地域がん診療連携拠点病院の必須事項として実施が義務付けられていることもあり、現在ではこれらの病院をはじめ多くの病院・診療所で実施されている。ここで登録された情報は地域がん登録に組み込まれることになるが、地域がん登録は罹患数や率の測定などの基本的な目的に加え、受療状況の把握、生存率測定、がんの予防・医療対策の企画と評価、がん医療活動の評価と援助、疫学的な原因の究明、生活環境のモニタリング、統計成果の報告などが意義とされている。

標準化された院内と地域がん登録の登録項目はやや異なる部分もあるが、これら地域がん登録で収集された項目は正式な手続きによって該当する利用者には情報が還元されることになっている。本県の地域がん登録の利用規定と申込書はネット環境で入手可能である。

『集計資料』と呼ばれる、県がん登録事務局で集計、解析・評価し作成された統計資料のうち、公表された以外の統計資料は所定の利用申請書を提出することにより入手可能である。この方法で入手した情報を用いて、例えば「鶴岡のがん」を毎年公表することは容易である。これらにより域内の各種がんの罹患頻度、検診発見がんの頻度等々、詳細な地域情報を得ることが出来る。その他、『登録資料』と呼ばれる特定の個人が識別され、又は識別され得る患者単位又は腫瘍単位の資料があるが、この場合は申請者の所属する機関等の倫理審査委員会の承認を受けていることとされている。ただし、所属する機関等に倫理審査委員会が未設置の場合は、所属長の文書による承認を得ていることともされ、場合によっては倫理委員会が必須ではないとも考えられるが、原則的には医師会として倫理委員会を設けるとか、基幹病院や大学病院との共同の研究事業として倫理審査を受けるという方法が必要であろう。詳細については「山形県がん実態調査登録資料等の利用及び提供に関する取扱要項」を参照していただきたい。それらの手順を踏んで得られる情報を元に、例えば検診センターにおける検診の精度管理が可能となる。感度・特異度を正式に毎年測定する意義は大きく、これでこそ、がん検診実施機関として精度管理を行っていると言えよう。その他、胃の内視鏡検診の果たす胃がん死亡率低下への役割や皮膚がんの地域内発生調査、各病院の診療がん患者の 5 年生存率、乳がん検診研究へ参加した場合の要求事項への対応等の概説を行った。

新年の抱負（年男・年女）

幾度目かの丑年を向かえ、地域医療に貢献など大きな抱負は今更無理ですが、今暫らく医師会々員として患者に接しいろいろな点で勉強してみたい。

また余技にも欲を出してみたい。

<中村整形外科 中村純>

早いもので鶴岡へ来て10年になりました。鶴岡病院は平成24年の移転改築を目指して準備を進めております。新しい病院はこれまでのイメージを脱却して住民が気軽に利用できるものにしたと考えておりますのでどうぞよろしく願いいたします。

<山形県立鶴岡病院 灘岡壽英>

今年、還暦を迎えます。黒沢眼科医院を開業してから20年になりました。今後は、無理をせず、毎朝のテレビ体操、最近流行のスロートレーニング等で体調を整えながら、仕事を続けていければと思います。

<黒澤眼科 黒澤明充>

庄内で開業をさせていただいてから、初めて年男が回ってまいりました。日頃からご指導と診療連携を賜り、本当にありがとうございます。

本年は、今後の当法人の更なる診療体制充実を目指して、第3期事業計画を推進致して参りたいと存じております。

何卒、今後とも御指導御鞭撻の程、宜しくお願い申し上げます。

<三川病院 錦織靖>

クイズ今年で何回目の年男となるだろうか。

$84 \div 12 = 7$ 回。ブー。生まれた年を入れて8回目になります。

2009年、窮する年は余り有難くないが蒼穹の穹（大空）と考えれば気持ちがいい。ギュウ（牛）チャンの様にヨダレをたらしながらもゆっくり歩いてゆきたい。

<石黒栄一>

牛は、一步一步大地をたしかめながら、ごくゆっくり歩く。時には速く走ることもできる。振りかえれば、自分も、牛に似たように生きて来た。今年も、このペースでゆきたい。

新年にあたり鶴岡地区医師会の増々の御発展を御祈り致します。

<林医院 林順一>

おかげさまで無事去年の12月に3周年を迎えることが出来ました。今年が丑年生まれらしく『根気と我慢強さで、一つの事をコツコツ』と行っていきたいと思います。ご指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

<宝田整形外科クリニック 阿部周市>

荘内病院に勤務して足掛け29年になります。いつの間にか現役中一番長く居座っている勤務医になってしまいました。小児科医が不足しているといわれる中で3人、4人と小児科医を増やし、今では研修医を入れると9人の大所帯です。今年が新生児部門の専門医が増員される予定ですし、県からはNICU機能を有する県内4番目の病院として認められています。先行きは不透明です。

還暦を区切りとして新たな人生設計を模索中です。今後とも宜しくご指導、ご鞭撻のほどお願い申し上げます。

<荘内病院 伊藤末志>

24年1月3日丑年山羊座、本当は23年12月生まれ子年射手座です。外科医の両親が何日間も何を迷っていたのかは不明。とにかく2年連続の年男、占いは良い方を選んでいきます。血液型は必ずA型と言われますがO型。両親、姉（早苗Dr.）全てO型ですが性格は全員不一致、千差万別な血液型と理解しています。趣味は人間観察と人の物まね、そして他人を笑顔にして楽しくさせる事。写真は私の診察室、ウェアはサザンのコンサートグッズ、応援団のメンバーです。抱いているのはク〜ちゃん（メス・アメショーのミックス）、母親のチャ〜ちゃんと週3回の当直、7時から7時勤務で疲れ切って帰る私を癒し

てくれます。医療は人間愛とチームワーク、私のモットーはいつでもヤンチャでオチャメ、今年もその路線で笑いを取り楽しく仕事をしたいと思います。

<宮原病院 宮原信弘>

病める人の為にと社会に送り出されて数十年。いつのまにか高齢の方々の気持ちを実感出来る年齢になってしまいました。

ノロノロ牛歩ですが今年も元気になってどんどん成長してゆく子供達を励みにして努力してみます。

<真島医院 真島靖子>

また一つ年をとります。

最近視力の低下と 50 肩に悩む日々ですが、気持ちだけは若くがんばりたいと思いますので、どうかみなさん、今年もよろしくお願いします。

<介護老人保健施設みずばしょう 横山喜恵>

医師会の皆様には、大変お世話になっております。今年は何男と言われても、あまり実感もございません。これまで同様のペースで毎日を過ごしていただけます。

今後とも、よろしくお願い申し上げます。

<乙黒医院 乙黒弘樹>

明けましておめでとうございます。今年還暦を迎える年齢になりました。

還暦などというものは他人事と思っていたら、いつの間にか 60 年も経ってしまいました。

瞬く間の 60 年でしたが、ここまで来れたのも皆様のご支援によるものと感謝して、これからも微力ながら地域医療に役立つように努力していきたいとおもいます。

<斎藤医院 斎藤慎>

表紙写真にご協力いただいた先生の紹介（敬称略）

伊藤末志

横山喜恵

乙黒弘樹

宮原信弘

錦織靖

黒澤明充

石黒栄一

中村純

灘岡壽英

林順一

斎藤慎

真島靖子

ご協力ありがとうございました。



庄内プロジェクト：地域緩和ケアサポートチームが目指すもの

協立病院附属クリニック

院長 高橋 牧 郎

これまでの連載で、厚労省の戦略研究である鶴岡・三川地域における「緩和ケアプログラムによる地域介入研究」（通称：庄内プロジェクト）の概要と地域の中核病院である鶴岡市立荘内病院（以下、荘内病院）の役割はおわかりいただいたことと思います。今回は、連載の第1回でも触れられていましたが、このプロジェクトの中で設置された「地域緩和ケアサポートチーム」についてお話したいと思います。

庄内プロジェクトは、実質的には荘内病院と当地区医師会が協力して受託をした“介入研究”ですが、それは多くのがん患者様の入院を担当している荘内病院および鶴岡協立病院、斎藤胃腸病院、宮原病院と地域の開業の先生方が協力して地域に緩和ケアを普及していくモデルを作る取り組みに他なりません。もとより医師だけで緩和ケアが出来るはずはなく、地域の医療、介護、福祉に携わる多くの職種の皆さんと協力して進めていくことが必要になります。そのためには、みんなが緩和ケアについての理解を深め、みんなでスキルアップに努めつつ、お互いの連携、ネットワーク作りをしていくことが求められるものと思います。

その中で、地域で緩和ケアを担うことになる医療・介護・福祉関係者をサポートするためのひとつの仕組みとして、地域に出て行く組織である「地域緩和ケアサポートチーム」が設置されました。これは、荘内病院に設置された「緩和ケア外来」と共に地域でがん患者様を診ていただく診療所の先生方をバックアップする役割を担うことになります。

「地域緩和ケアサポートチーム」（以下、サポートチーム）の具体的な機能としては二つあります。ひとつは、「コンサルテーション」、もうひとつは「出張緩和ケア教育（アウトリーチ）」です。中核病院である荘内病院以外の病院、診療所、その他の介護・福祉施設からの依頼に基づいて、前者では、担当されているがん患者様の緩和ケアを進める上で症状コントロールなど困られていることについて、個別に相談にのり、場合によっては一緒に患者様を診察して、解決に向けてのお手伝いをさせていただきます。後者では、緩和ケアに関する知識・技術の向上のために、ご依頼いただいた施設のニーズに合わせて、その施設に出向いて、その施設の医療・介護・福祉関係者の方々に対して、講義、ワークショップ、カンファレンスなどを行うことにな

ります。

サポートチームのメンバーは、鶴岡協立病院の高橋牧郎、高橋美香子と緩和ケアの先進病院である東札幌病院でしっかりと研修を受けた訪問看護ステーションハローナースの本間幸井と訪問看護ステーションきずなの石川知子、そしてあかね薬局の篠田太郎で構成していますが、介入研究対象の他地域のような緩和ケア専門家というにはおこがましく、実は当地区の多くの医療者の皆さまにその道の専門家として支えていただくことにより活動が可能になっているという面があります。さまざまな症状緩和のためには、各科、各職種の専門知識が必要になることもあり、先生方のご協力を仰ぐこともあるかと思えます。一緒に勉強させていただければと思っています。

コンサルテーションもアウトリーチも荘内病院の緩和ケアサポートセンター（以下、サポートセンター）にメール、FAX、電話のいずれかでご依頼いただくこととなります。コンサルテーションなどは依頼内容によっては緩和ケア外来受診の方が適当な場合もありますので、サポートセンターで振り分けた上でサポートチームに連絡があり、その後、サポートチームより依頼元にご連絡申し上げ、詳細を詰めていく方式をとっています。専用の依頼用紙がありますので、サポートセンターや地区医師会にお問い合わせいただければと思います。メンバーの活動はそれぞれの所属を離れて庄内プロジェクトのチームの一員として行いますので、このプロジェクトの中ではコンサルテーションもアウトリーチも無料となっておりますのでお気軽にお申し付け下さい。

庄内プロジェクトは、緩和ケアを必要とする患者・家族の方が安心して地域で暮らしていけるための街づくりとも考えられます。それは、医療・介護・福祉関係者のみならず、一般市民も含めての地域全体の取り組みになるわけですが、サポートチームとしましては、開業の先生方をはじめとする医療・介護・福祉関係の皆様が地域での緩和ケアに安心して取り組みますようにサポートに努めて参りますので何卒宜しくお願い申し上げます。

～ 編集後記 ～

齋藤憲康

新年明けましておめでとうございます。

丑年の新年号、そして新たな出発である「めでいかすとる 201 号」の編集後記を担当させていただき
光栄です。とはいうものの、世の中は 100 年に一度をいわれるほどの景気後退に明るい話題はなかなか
見つかりません。

しかし、鶴岡地区医師会は今年は飛躍の年になるのではないのでしょうか？

まず「庄内プロジェクト」は順調に進捗しており、既に対象の患者さんも 28 名（12 月 5 日現在）を
数えるまでになりました。頻回に勉強会を開催していただき、カンファレンスもきめ細やかに行ってい
ただいている庄内病院の鈴木先生はじめ担当スタッフの努力の成果も現実のものとして実を結んで来
ているようです。

次に長年の懸案であった新「庄内地区健診センター」建設がいよいよ始動しました。すでに用地の確
保と設計業者の選定が終わり、具体的な設計に向けて建設準備委員との具体的なプランの作成が始まり
ます。平成 23 年 4 月の開所を目指して、受診しやすく、働きやすい、また環境にも優しい理想的なセ
ンターを建設するべくがんばっていきたいと思いますので、会員の皆様にもご協力お願いいたします。

もう一つは中目会長の努力の賜物ですが、厚労省の対がん研究事業のひとつであります「乳がん検診
における超音波検査の有効性を検証するための比較試験」の実施機関に選ばれました。今後 2 年間にわ
たり若年者における超音波乳がん検診の有効性を調べることとなりますが、これには厚労省からの補助
金もつきます。今年から行う予定であった若年者の希望者に乳がんの超音波検査を行うという事業計画
にはまさに追い風になりました。

医師会の事業は数多くありますが、今後も業績の向上だけではなく、本当に会員の先生方に「医師
会員で良かった」と思われるような事業に取り組んでいきたいと思っておりますので、会員の先生方もぜひ忌
憚ないご意見を聞かせていただきますようお願いいたします。本年が皆さまにとって健康で良い年で
ありますようにお祈りいたします。

編集委員：中村秀幸・伊藤末志・福原晶子・齋藤憲康・小野俊孝・渡部隆二

発行所：社団法人鶴岡地区医師会 山形県鶴岡市馬場町 1-34

TEL 0235-22-0136 FAX 0235-25-0772 E-mail tsurumed@mwnet.or.jp

URL <http://www.mwnet.or.jp/~tsurumed/>

印刷所：富士印刷株式会社 鶴岡市美咲町 27-1 TEL 22-0936(代)